唐獅子

美術公募展

上原誠勇

来年の春、名護市で賞金付きの美術公募展が開かれると言う。沖縄の美術界では、歴史上初めての事ではないだろうか。グランプリ大賞には一〇〇万円が贈られ、受賞作品は賞金と交換買い取りと言う形が取られ、コレクションされると言う事である。ひところの活気を失いがちな沖縄美術界には、タイムリーなグッドニュースである。

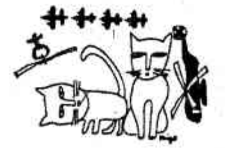
他府県の企業や団体・マスコミ等による公募展では、賞金付きはかなり以前から定着しており、めずらしい事ではない。賞金額も一〇〇万円～二、三〇〇万円ぐらいが設定されている。しかし最近の賞金付き公募展では五〇〇万円というものもあり、生活が決して楽ではない美術家には、大きな励みになり、一つの目標にもなっている。

また、グランプリを受賞した作品は、その賞金で買い取られることが一般化しており、主催者側の団体や、美術館等のコレクションに加えられている。更にグランプリを受賞した作家は、半年から一年程度の外国への遊学の特典が与えられるなど、主催者側のポリシーがはっきりしており、美術家の育成と芸術の発展のための積極的な対策が取られている。

さて沖縄の公募展はどうだろうか。沖縄には二つの公募展があるのだが、四十年以上の歴史を誇る「沖展」、日本復帰後に始まった県主催の「県展」、いずれの公募展も前述のような、発展的システムと方向性のある姿勢が見られない。特に歴史と伝統を誇る沖展がマンネリ化と言われながら、「ただやっているだけ」と見えるのは残念である。

もし、沖展賞の作品を毎年主催者が買い取ってコレクションをしていたら、どうなっていただろうか。県知事賞を県が買い取っていたら、どうなったであろうか。もっと具体性のある美術状況が生まれたに違いない。来年から始まる名護市の公募展はどう発展して行くだろうか。本格的な美術行政の取り組みを示して欲しい。

（画廊沖縄代表）



カット・砂川恵光